

昭和二十四年八月二十五日
第三種郵便物
発行認可
（毎一回郵・十五日發行）

（通第二三一号）

慈

光

第二十卷

第八号

次

近角常音先生講話……………大字三右門……………(1)

蕩児と窮子(二)……………福島政雄……………(5)

自然の調和……………和才誠司……………(12)

アメリカの仏たち……………西元宗助……………(15)

歎異鈔第二章……………花田正夫……………(17)

近角常音先生講話

大字 三右エ門記

今日午前の席では失礼ながらこの村の庄左の奥様のお喜びなされた始終をお聞き頂いたのであります。あの話は信仰上味わいの深いお話でありまして、この話を聞くほどの人、皆さんが喜んで聞いて下さるのであります……。

この話も、今の庄左君の奥様のお話で、元々私は知らない人でありました。私の兄貴が脳溢血で倒れようやく危機を脱した頃のことです。御主人の庄左さんが上京して来られたのであります。その用件は家内の代理で御礼に参上しましたと申される。

私共の方では長年仏様のお話聞いて頂いているが、主人が奥さんの代理で御礼に来られるということとはかつてないことである故、びっくり致したのであります。

ここのお家庭は、先にも申した様に、前の奥さんが三人の予供を残して亡くなられた、今の人は後添いとしておいでになった方で、まあその後添いになった人から見ると残された三人の予供をよく育てる、これが大事なことを考え

て一生懸命苦心なさるけれども、人間のすること故これに限りがあることで、どれだけやっても、どれだけやっても必ずしもよい結果が来るとばかりは申せぬものなのであります。

苦勞して奥様やっているにかかわらず、そこがいかぬ、ここがどうだと御主人から叱られる、それで奥様は心が安らかでない。主人が外へ出て行って、下駄の音がせぬようになれば、そっと足音しのばせてもどって来て、障子の隙間からのぞいているのでなろうか、とこういう風に気が廻ってしょうがない。こんな話はよくある話であります、私はこれは有難いお話と思うのです。足音せなくなれば自分を見ておるように思う、ひがんで来るのであります。

これで心の安んずるところがない、それ故奥様はお寺の御説教を聞かせてもらい、心の安心させて貰う外ないとお寺参りを三年せられたのである。お寺参りというものは妙なもので、お説教聞かせてもらうても始めのうちにはチンプ

ンカンブン、何を仰言っているやら分らないが、全く仏様のお話を聞かなかった人が聞かせてもらっているうちに、妙なもので三年もお寺参りしお説教聞かせて貰っている間に何時の間にやらありがたくなってくる。お説教者の言われる一語一語、その通りその通りとうなずけるようになる

これはまあいらぬ事なれど、その通り、仰言る通りと受けているのは、たとえば、如来様が助けん^{ひとかど}と仰せ下さるのに、その通りその通りと云うているのは変なことであります。これはわれわれからほめていようなもので、奥様もその通り、ごもっとも、ごもっともとなって、一角自分では本当の信心頂いた気持ちになつてしまわれ、自分は信心を卒業した積りで、自慢話でなければ御本人はそのように心の中で思うておられたのである。人よりはちとばかりよしだ、御信心頂いている、他の人よりは自分の方がましだと内心思うておられたのである。

その頃、私の方から『信界建現』が全国へくばられたので、庄左さんへもとき、それを御覧になった。その主題は「弘願真宗」(ぐがんしんしゅう)という、これが書かれている。これは他力真宗の上ではかなめとも申すべきお言葉で御聖教の中には到る処に仰せられている。御和讃に

弘願真宗にあいぬれば 凡夫念じてさとるなりとあり、

「弘願というは仏の慈悲限りなくきりないお慈悲故、弘願と申す。また弘願と云うは大経の説の如し。一切善悪凡夫の生きるは、彼の仏の大願業力によりて増上縁(そうじょうえん)とせざるはなし云々」

とあるように、善人だけ助ける仏でない、反対に悪人だけ助けるという仏でもない、一切善悪の凡夫人をことごとくお助けと仰せられる、一切阿弥陀仏の大願業力によって生れさせていただくのである。われわれ努力して信心いただくにかかるのであるが、何、そうでない。みなこの仏様の大願業力に引張られて仏になるのである。大願の船に乗って渡してもらう、仏の御胸は広い限りない、凡夫のわれわれ如き小心とちがう。

「一切善悪凡夫の生るるは、彼の仏の大願業力によりて増上縁とせざるはなし」と、仏はかく広大な慈悲をお説きになったのである。善悪すべて区別がない、善人でなければ助からぬ、悪人でないと助からぬ、そんなものでないのである。どんな者にもさからわぬ、どんな者をもたすけてやりたいの仏様のお心、大願、弘願、このお言葉は到る処に仰せられてあるのであります。

経道滅尽ときいたり 如来出世の本意なる

私の兄貴の言いますのは、どういふことを言うたかと申しますと「何が人間、間違いかというに、われわれ御同様の間において、このこと一つ間違いないと思うていることそのことが、一番間違いない」ということを申しておったのであります。矢でも鉄砲でも持って来い、これだけは誰が何と言うとも、自分は間違わぬと思うていること、これが人間何より恐ろしいのであります。それが間違いの根本なのであります。

庄左さんの奥様、これをお読みになって驚いてしまわれたのである。「わたしぐらい信心者はない」と考えて高あがりしていた。そのことが間違いの本であることに気づかれたのであります。

わたしの兄貴の困ったことは、自分の正しいと思うていること、それがいけないとなって苦しんだのでありますから、この経験を持つ兄貴の書いた本でありますから、よくよく思うて書いたものであります。或る日曜のこと、これは兄貴の晩年のことでしたが、私が日曜講話を済ませて部屋へ入って行きましたら、兄貴が「今日は何を話して来たか」とたずねますので、弘願真宗のことをお話して来たと申しましたら、兄貴が「わし一代の間、自分善い、自分善いやってきた、申しわけないことである」とししみじみ話したことであります。

ないいたしておりました。然るに仏様はその性分が可哀想と仰せ下さるのかと気付かれて、仏の思召しいただかれて見るとそれ計りありがたいとなって、深くおよろこびなされたのであります。

それまでは、仏様におあい申すには家の御仏壇か、お寺へ参らぬとおあい出来ぬと思うておいでになったのに、その後はかまどで火を焚きながら、高あがりする自分なるにつけお見捨てない仏様思わしていただいてみると、火を焚きながら仏様にお目にかかれる。畑に行ったら行つたで、その時、その時のあさましい性分なるにつけ仏様にお目にかかれる、これはお伝言を持って来られた御主人のお話でありました。

そのご主人の庄左さん、家内に負けたといわれる。信心のことばかりは家内に導かれる。信界建現も家内が私に読ませて、ここはこう、あそこはああと註釈して聞かせてくれる。何とも御信心のことでは太刀打ち出来ませんと仰言った。

この話はなかなか著しいこと故、東京ではよくお話に出して聞いて頂いて居りますが、皆様も注意してよく聞いて下さるのであります。

私は十九年十月に、ここへ帰って参りました際、もう東京へ帰るな、ここに居なさいと貞顔になって疎開してここ

さて庄左さんの奥さん、『信界建現』を読んでみられて、自分の悪いことは何かと考えて見られた。普通のことは間違いがあろうけれども、この信心のことは間違わぬと思うてござったのに、その信心いただいて、自分はいただいて、喜んでいると高あがりし、それでぐるりに突張って行く自分であった。成程このところを先生は仰言つてござったのか、これが一番の間違い、悪いことであつたのかと、そこまではようやく分られたのであるが、その後がわからぬ。

間違つていた悪るかつたと分つても、それではつらいばかりで何ともならぬ。こうして考えに考えて分らぬままに夜も明け方となつてしまわれた。そうこうしているうちに段々に分つてきたことは、お慈悲を蒙つて、それで知らせていただいた信心であるに、自分は自分の聞き上手でうまいこと信心いただいたように思いこんで、自分がいただいた、私がいただいたと手柄顔に自分で考えていた。それを仏様が御覧下されて「それだから捨てぬのだ、捨てぬのだ」のお慈悲で向うて下さつたのでないか。然るに自分は、自分がいただいた、間違わぬと言いつつっている。こと仏様のご信心の上においてもこの通り、このご信心を振りかざして、日暮らしのことにつけ、自分が自分が、で言いつつっている。成程これは私が悪るう御座いました、考えそこ

に留るよう真剣になつて言うてくれた人はこの人だけでありました。翌年二月、疎開して帰つてみますと、庄左さんは心臓病で急死されたあとであつた。庄左さんは

「自分も仏様のありがたいこと大体のところわからせてもらえているようでありながら、どうも最後の一分のところがどうしても分らせて貰えぬ、これを聞かせて欲しい」

と言うておられたがそのまゝお別れしてしもうたのでありましたが、御本人はよくよく聞きたがつておられたものであらうと思つて私も申わけなく思つておりますことでもあります。

常音先生詠

このころこれを阿闍世とのたまひて見捨てじといふ
み慈悲なりしか

よしあしはひとにはあらん大悪の阿闍世われにはよし
あしはなし

蕩 児 と 窮 子 (二)

福 島 政 雄

それではこの仏教の方の窮子というのは法華經の信解品しんげほんに出ておりますところの長者窮子の譬というのであります

それはたとえは人があって、年がまだ幼い時に父を捨てて逃げて行って久しく他国にさすらいしておつて、十年廿年、五十年も経った。この十年廿年五十年ということを一寸考えておいていただきたいのであります。そして年がすでにもう大きくなって、これも非常に困窮するのであります。そして諸方に走せ廻つて自分の着物や食物を求めております。そこで表面にそう書いてありませんけれども、この子供は親なんか忘れてしまつて居るのであります。ルカ傳の譬の方では子供はとにかく親というのを忘れずにして悔い改めて親のもとへ歸つて行くのでありますけれども、この長者窮子というのは、もう親があるというようなことは忘れてしまつております。それだから「漸々遊行してたまたま本国に向いぬ」とありますが、だんだん歩いて行くうちにフトその足が本国の方へ向つた。困つたから父

いるその所へまいります。今のように親のところへ歸ろうなどと思つて来たのではありません、不図足がそうした方に向いたというのであります。

父の方からは始終子供のことを考えております。子供と別れてからも五十余年、然し人に向つては自分が子供が居なくなつて久しくなるといふようなことは微塵も云いません。ただ自分ひとり考えて、ああ実にあの子を失つたのは恨めしいようであるといふように思つております。自分はまだ老朽でしかも沢山の宝物がある。金銀などの宝物が倉一杯にあるけれども子供といふものがない、自分が一旦死んでしまつたならばこの宝物はちりぢりになつて無くなつてしまふであらうと。そんなことを考えております。それだから始終子供のことを思つております。もし自分が子供が見つかつて、宝物をすっかり与えたなら自分は心が落着いてもう心配が無くなるであらうといふことをしきりに考えております。

そういう時に貧窮の子供が村から村へとめぐり歩いて、「たまたま父の家に到る」でありますから父の家に歸るなどと考えたわけではありません、偶然その足が父の方に向いて父の所へ来ました。そして門の所にじつと立ち止つてはるかに父を見ます。すると父親は獅子の座、非常に立派な椅子かなんかでありましょう。そこに坐つていて宝の机

親のところへ歸るなどと思いません、父親を忘れて居ります。

そうすると父親の方では、しばらくも忘れられません。大変にお金持と云いますか、財産一杯というような状態になつて、ある都に自分の立派な邸宅をかまえて、その立派な邸宅の門の内より毎日外を眺めていて、若しや自分の子供がフト歸つて来てこの前を通りやしないかと思ひながら待つております。その財宝、たからものというものは無量でありまして金銀・珊瑚・波瑠珠・琥珀さういふものを並べたてて倉一杯はいつています。それから沢山の召使の者もありそこで働いている者もあります。また象とか馬とか牛とか羊とか、これまた無数にありまして、さういふものを出し入れして大いに商売をやっているのであります。他国から商売人なんかがさかんにやつて来ます。

さういふところに、今のすつかり貧乏になつた子供があらちちこちらの村里を歩いて、とう／＼その父のとどまつて

のようなもので足をうけている。そしてもうものバラモン、刹帝利、居士と云つてありますから、出家の人々或は士族といふ人も、或は一般の人々も皆そこに来て取りまいております。自分のからだを真珠のような非常に高価なもので飾つております。左右には召使のようなものが手に私はつ子こを持つてじつと立つております。そして上を宝の帳とばりをもつて覆つてあります、旗も立ててあり、香水を地にそいであります。種々の美しい花をパツと散らしてあり、宝物を並べてあります。そして出したり入れたたり、出納のことをやつております。

そのような飾りがあつて父のその威徳は特別に尊く見えます。窮子はその父の勢力あるのを見て、これは怖ろしい所だ、こんな所へ自分が来たのがあやまちであつたと考えまして、これは王様だらうか、王様と同じような人であらうか。自分はこんな所で働いて物を貰うといふような所じやない。自分はこんな所よりも貧乏な村に行つて働いて衣食を得るやうにしよう、久しく此処にとどまつてゐると無理に何かさせられるかも知れん、こんな所に一時も落着いて居られんと考えて、「疾く走り去りぬ」でありますから大急ぎで走つてそこを逃げて行きます。

その時に今の長者は獅子座に坐つて、門に來た子供を見て父の方からはたちまちに解るのであります。これは自分

の子だと。そして非常に喜んで、こういうことを考えます自分のこの宝物も受けつがせる者が出来たと。今まで自分は子供のことを考えていたけれども姿も見なかった。ところがたちまち子供の方から来た、自分の願ひにかなっている。自分は年をとってさんざん老人になっているけれども然し宝物のことを非常に惜しく思っている。

そこですぐそばにいた者に命じまして、急いであの若者の跡を追うて連れて来い、と。その使いの者が走って行ってその子供を捕えるのであります。ところがその子供の方は非常にびっくりして、ああ仇が来たと云うようなことを云って、大いに叫ぶのであります。自分は何も悪いことをしたことはありません、どうしてつかまえられるのでありますか、という。使者は逃がしてはならぬと思ひますものですからいよいよ急にその子供を捕えます、そして無理にひきいて帰ろうとします。子供の方では、ああ自分は罪もないのに捕えられる、きつと殺されるのに相違あるまい。そう思うとあまりに恐ろしいのでその場で氣絶してしまふのであります、「悶絶して倒れる」のであります。

すると父親は、はるかにそれを見て使者に云ひますには『もうそれを連れて来なくてよい、冷い水でも顔に注いでやって氣がつくようにしてやりなさい。もう何も話をするな』と云ひます。

れでは賃金を先に下さいと賃金を貰つて一緒に来まして塵埃の掃除をいたします。

ところが父親はその子供を見て非常に悲しい感じをいたします。それで窓の中からはるかに子供を見るとすっかり瘦せ衰えて塵埃に穢れております。そこで父親は自分の立派な着物を脱いでしまつて、掃除をする道具を手にもつて穢い衣を身につけ、その上に穢い塵などをふりかけて自分の身を汚して、右の手に掃除をする器を持つて、「恐れるところあるにかたどり」でありますから恐れるような姿をして、そして他の働き人に対しては、お前達よく働いて決して怠つてはならぬぞと云い、そして自分の子供の方に近づいて行きます。その子にはこういう風なことを云ひます。お前は始終ここで仕事をするようにせよ、外のところへ行かぬようにせよ。するとお前には賃金を二倍、沢山あげる、その外欲しいものは何でもあげる、器も欲しければあげる、米や素麺の類、食物が欲しければそれもあげる、塩や酢なんかもあるからそれをあげる、疑つてはいけないそれから大分年をとった人が居る、それをお前が使いたいならば使うことが出来るようにしてあげよう、よく安心して居れ。「我は汝の父の如し」私はお前の父親のようである、と云うのであります。

その心配するな、何故かといへば、自分は年とて老人

それは父親はその子供の心持が下劣であるということを知つて、自分は甚だ豪貴で子供から憚られてゐることを知り、明らかに自分の子供であると知つて居つても、方便をもつて三人に向つてはこれが自分の子供であるということとを云ひません。

そこで使の者は、お前を許す、行きたい所へ行け、と云いますと、子供の方は非常に喜んで、ああやつと助かったというやうなことでありまして、それから貧しい村へ行つて賃仕事でもして衣食を求めて居るのであります。

そこで長者は考えるのであります。何とかしてその子供を連れて来させようと思つて、方便をもうけてひそかに二人の姿形がすっかり瘦せ衰えてゐるやうなものを遺^{うがた}わすのであります。お前等はあそこに行つて、あの非常に貧窮になつてゐるあの子に云え。働くところがある。そこでは今お前が貰つてゐる倍の賃金を与えるだろうと。そして子供の方が承知したら連れて来い。どんな仕事をするのかと聞いたならば、お前を雇うのは塵埃（あくた）を払い掃除をやるために雇うので、二人もお前と一緒に働くのだと云うがよい。

そこで二人の使いの者が今の貧窮の子供を探し求める、そしてつづさに今の事を伝えますと、その貧窮の子は先ず価（あたひ）を取りてのちに塵埃を払うとありまして、そ

となつてゐるがお前はまた若い。お前は何時も働く時に怠けたり、怖がつたり、恨んだり、そういうことをやってはいけない、お前にはそういう悪いところは無いと思う、他の働き人とは大分違ふ。だから今後、「所生の子の如く」でありますから、自分の産んだ子のようにお前を取り扱ふと、こう云うのであります。

そこで長者は子供に名をつけるのであります。まだ子供であるといふことをあかしはしませんけれど、子供に名をつけてやる。そして自分の子の子であるといふのであります。

子供はそのように待遇せられることを喜びますけれども矢張り自分は他所から来た雇人としております。そこでまた二十年という長い間塵埃の掃除をさせる。それから二十年過ぎるといふと心が大分に信ずる心が出来てくる、物を出し入れするのに憚りなく出し入れするようになる。然し矢張り子供は、この人の子供は自分であるといふやうなことは夢にも思ひませんから、まだ子供の心はもとの通りであります。

その時、この長者が病気になる、もう死ぬる時も近いといふことを知つて、それで子供にこういうことを云ひます自分は沢山の宝物があつて蔵に一杯ある、そういう宝物をお前にまかせる、みんなお前がそれをやるがよい、つま

り出納係りになってこの宝物をお前が自由に扱えというのであります。

それでこういう心をきとつてくれよ。今自分がお前と別者じやない、だから自分のものをあつかってしつかりやつてくれ、というのであります。

子供の方はそういうことを聞いて金銀など珍らしい宝物そういうものを自分が取り扱うけれども、一つでも自分の物にしようという心は無いのであります。矢張り心持はもとの通りであります。まだ下劣の心は捨てられません。

それからしばらくたちまして父親が子供の心をじつと見ておりますという、子供の心がようやくひろびろとなる大きくなる、大きな志を抱くようになります。そして自分は今まで本当に小さな心であったということを自覚するようになってきます。

そうすると父親の方がこの生命がいよいよ終わろうという時に、その子に命じて親族、國王とか、大臣とかそういう知っている人々を集めて、そこで始めて親子の名告りをするのであります。

諸君どうぞ知って頂きたうございます。これは私の子供でありまして、私の生みの子供であります。それがしの城中で私を捨てて逃げて行ってしまうと長い間苦しんだ生活をして居りました。その元の名を斯様々々、私の名は斯様

供を待つ心をいうのであります。親が何処へ行つたか分らない子供を待つということになりますと、五年待っても十年の感じがする、三年待っても三十年、そのところが一寸分ってきますという、この譬えというものは非常にありがたい譬えということになってまいります。私共たとえ信号のある四つ辻、そこでじつと待っていると長くてたまりません。そのくせ歩いていると忘れていて、ああもう変ったかと思ひますが、じつと待っておりますと信号の変るのが長いものであります。この場合は親がどうなつたか分らない子供をじつと帰って来はしないか、何処かに行つては居ないだろうかとして待つのでありますから五年たつても五十年、三年たつても三十年、いかにもその通りだということ、私はそういうところからさうし分つてまいります。

そういうことと同時に、一体金銀財宝、いや羊だ豚だ牛だという沢山の家畜もいる、沢山の財産があると、これは何であろう。これは臼杵祖山先生から大事なことを云つて下さつたのであります。先生が大分県に住んでおいでの頃に一度位、先生は広島市へ来て下さつて種々仏教のお話を聞いてもらいました。或時そこへ行つて聞いておりましたら丁度この長者窮子の譬をお話になっている。そしてお話が終つてから先生が仰言るには、これは譬話であるから金

斯様で、私は心配しながら尋ねもとめて居りました。ところがこの子供がやつて来て会うことが出来ました。これは実に私の子であります、私は実にその父であります。それで私の持つています一切の宝物は皆この子供のものであります。子供が出し入れしたところのものはみんな子供が分つております。以上で父親がその死にぎわに親子の名告りをする、これで長者窮子の譬というものが終つております。

さあ、これは譬話であります、第一、五十年たつたとかそれからまた二十年たつたとか、理屈で考えますと、五十年たつたらもう子供じやありませんまい、子供と云つてももう老人じやありませんか、こんなことを一寸云いたくなるのであります。それが仲々わかりませんでした、こんなことで分り始めました。御承知の中国の詩を集めたところの唐詩選というのがあります。あの中有名な詩であります、白髮三千丈憂いによってかくの如く長しというのがあります。自分の白髮が三千丈、これは自分の心配事のためにこんなに長くなったと。そうした解釈をしてある本を読んでみましたら、それは三千丈とはその憂いの長さ、自分の心配事の長さが白髮三千丈と云つていいほど長いのだと、そうした解釈をしてあるのを読みまして、ああそうだったと。それから長者窮子の譬の五十年だ、二十年だというのが分りはじめたのであります。というのは、親が子

銀財宝とあらゆる宝物があるのは、実は親のいのちにとえてある。親のいのちというものは、この世のいのちが終ると同時に、子供が六人あつても十人あつても、一人一人はその親の生命の全分が入っていくものだ。その親の生命のゆたかにある、生命の内容がゆたかにあるということを譬えてあるのが沢山の金銀財宝だと、こういう話を聞いて、私非常に感じました。というのは、その頃私は母を亡くして十年以上たつており、父を亡くして六、七年たつておりましたが一向親というものが分らずにいました。臼杵先生の御解釈を聞いて、その時から親というもののが分りかけたのであります。その時までは亡くなった親に対していい加減の心持を持つておりましたのが、さつき源信僧都の場合申し上げましたように、親というものはこの世のいのちを終ると同時に仏のいのちの一つになって、この自分に直接に心にひびいて来るものである。生きてゐる時の親子の關係よりも、親が亡くなつてのちの親子の關係というもののが非常に近くなると云えない深い關係であるということがその頃から分り始めたのであります。

この長者窮子の譬というものが、臼杵先生のお話によつて私の身につきはじめてのが私の四十三、四才の頃からであります。それで私若い人に申しますのでありますが、親というものが本當に分りはじめるのはさう早いものではな

い。親が亡くなって七年も十年もたってはじめて親というものが分りはじめる。その頃は自分はまだ四十才を越えている。そういうことを若い人に折にふれて申しますのではありません、この譬は非常にありがたいことであります。

それから非常に大事なことは今お聞き頂きましたようにこの長者窮子の譬というものは、親一人の働きであります子供の方ははじめから親なんか忘れております。その子供を種々の方便を用いて心持を深く広くするように育てて行く。それが親の働きになって、つまり親の働きの結果、子供が親子と云われても分るようになる。放蕩息子の方では、ともかくも私が悪るかったと云って帰ってくるのでありますが、こちらはそんな気持は子供に微塵もないそれを親の方から、何年も何年もかかって、子供の心が広く大きくなるようにと導いて行く。つまり親の働きただ一つでその子供が親というものが分るようになる。そこところが親鸞聖人の真宗において頂いておるところであります、私共が何かほまれある働きをして、それによっておたすけを得るというのでなくして、何処までも私共が逃げ行こうとする者を何処々々までも追っかけて、あらゆる手段をめぐらして、私なら私というものを親のお慈悲に気がつくようになるまで何処までも導いて下さる。そのところにつまりキリスト教にないところの尊いありがたいそ

自然の調和

今年の春は桜の季節に好い天氣が続き花を觀賞するに好都合であった。

脚にまかせ福岡周辺を方々歩いたが、その中で平和台公園堤防の桜が特に印象深かった。

純白の桜と、緑したたる柳が、互いに枝を交え、その影を下を濠にたたえたルリ色の水に映じ、燦々たる旭日がこれを照らしている光景は、色と光とが自然によく調和し、光赫焜耀（こうしやくこんよう）微妙綺麗（びめようきらい）の極致が、鈍重無感覺の私を強く刺戟し、特に印象を深くさせた。

無量寿経に、お浄土が七ツの宝をもって莊嚴せられてあると説かれてあるが、まことなるかなとつくづく身近かにおもふ。

色の調和について『柳は緑、花は紅』と云う言葉がある青が来れば青と弁じ、赤が来れば赤と弁ずる、青も赤も明白に意識して、しかもこれにとらわれないこと、引きずり

の關係、それがこの譬においてひしひしと味わえるのであります。そういう点でこのおたとえが非常にありがたいお譬であると感じております。これでお譬えのことについて一通りのことを申上げたつもりであります、一寸休ませていただきます。

昭和四十二年十一月二十七日

一道會館に於いて

身につく業

地獄へおつるも、極楽へまいるも、死んで行く先に地獄極楽がわかれてあるように思い、死ぬるまでの間にさえ、わが心を落ちつけばよいというが、皆々の心得違いの大体なり。

たとえば、こちらの道を行けば追剎（おいはぎ）が居るこちらへ往けばよい道という時に、こちらに足を踏みかえると追剎にあわぬなり。

然るに、首を切らるるほどの悪事をしてみたがよい。どこへ往っても油断はならぬ、隠れどころは無うなる。

われわれも、地獄、極楽を向うにおいて、道わけて行く気になるゆえ、らちあかぬ。身につく業じや、どこへ逃げても、逃げることならぬようになる。

香樹院語録

和才誠司

廻されないことが肝要である。

所詮浮世の生活はさまざまの雑事におおわれている、それを避けることはできないし、また避ける必要もない。唯赤白を明らかにする余裕がほしいのである。その余裕は自己を反省し、自己が罪惡生死の凡夫であることを知り、仏恩を憶うことにより、念仏を称えることによって自然に解決せられる。

自然界は、柳は緑にして花は紅、各自が他を犯さず、また他より犯されず、その特色を発揮し、各々そのところを得、よく調和がとれて、森羅萬象は正しく運行している。

ひるがえって人間世界の現状は如何、今や物質文明がすすみ、生活はやや向上しているが、精神面において、特に自由平等權利主張の思想が強く、いたずらに対立抗争にとらわれ、融和協調の精神にとほしいようである。

国の基本となる憲法問題をとりあげても、国論が対立し国民は日本国が今後如何になるかと、みな迷い悩まされて

いる。

教育は不偏中庸であるべきに、現在の日本教員組合は赤旗を振り廻わして大道をデモ行進し、日本教育をあたかも赤一色に塗りつゝふさんとするような印象をあたえているが明治の先覚者にしてまた教育者の福沢諭吉翁はこれを如何に見るであらうか。

今強調されている自由平等には、多分にわがまま勝手が含まれている。もとより時勢の流れ、人間の勝手に作つたもの、永続はしないが、国際間、労資間、政治経済教育等の争いより、家庭問題にいたるまで、いやしくも人の居るところ、日本人は精神の不安から動揺し、思想の対立抗争に悩まされている。

然るに、世の中はすべて衆因、衆縁の因縁法により複雑多岐であり、この複雑多岐の中に妙味がある。

味覚には甘味辛味酸味香味など、各種の味があり、これらを適当に調和したのが、山海の珍味、料理人の手腕である。

生花を見ても、上に伸びた枝、前後左右に出でたる枝があり、花や葉、果実など、形状と色の異つたものがよく調和しているところに、生花の美しさ、面白さがある。何事によらず、いかなるものにも調和のありがたさ、妙味を痛感する。

しかし、身のほどを知らぬとは、他人のことではない、実は私自身のことである。わが身の罪惡の深きほどを知らず、如来の御恩と云うことをば沙汰なく、ただ目の前の自分の利欲にとらわれ、他人を善いとか悪いとか、批判しているに過ぎぬ、実にお恥ずかしいかぎりである。

歎異鈔後序に

「善導の自身はこれ現に罪惡生死の凡夫、曠劫よりこのかたつねにしずみ、つねに流転して、出離の縁あることなき身としれという金言に、すこしもたがわせおわしまさず。さればかたじけなくも、わが御身にひきかけて、われらが身の罪惡のふかきほどをもしらず、如来の御恩のたかきことをもしらずしてまよえるを、おもいらせんがためにてそうらいけり。

まことに如来の御恩ということをば沙汰なくして、われもひと、よしあしということをのみもうしあえり。聖人のおおせには、善惡のふたつ総じてもて存知せざるなり、そのゆえは如来の御ところに、よしとおぼしめすほどにしりとおしたらばこそよきをしりたるにてもあらめ如来のあしとおぼしめすほどにしりとおしたらばこそ、あしさをしりたるにてあらめど、煩惱是足の凡夫、火宅無常の世界は、よろずのことみなもてそらごと、たわごと、まことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにて

私の家庭は、私が性来頑迷固陋で、これを矯正せんと、

私なりに努めているが、なかなか改らず、妻は私と周囲の人との調和に苦心しているようである。子は私と反対に常識にたけ、生活戦線に働いている。孫はすでに大学を卒業して米国に留学しているものもあれば、就職しているものもあり、また大学や高校に在学中など、多種多様であるがどこかに家庭の鬱屈を感じて楽しい。もし家庭が私如き頑固一辺倒のものばかりであつたら、定めし殺風景であらう。また新しがり屋だけでも如何かと思う。

家庭の性格が各々異っているが、幸い私が若い人達から新しいことを教えられ、どうにか調和がとれ、粗末な家庭生活をはそぼ喜んでゐる。私の家庭に他から交渉があつてこれを断わる場合、御趣旨に賛成であるが、祖父が反対でありますから、不本意ながらお断りしますと、責任をすべて私に負わせてあるようである。断りかたの善惡は問題外として、私の欠点、頑固さ偏屈さが、家庭に利用せられであることは、私にはありがたい。

萬人の望む平和な世界、幸福な生活は、闘争によって得らるべきものでなく、調和によつてこそ得らるべきであるのに、人はいたずらに闘争に明け暮れている。身の程を知らぬとも云うべきか。

「おわしますところをおおせはそうらいしか」

と示され、私の盲点を指摘して下さる。私の論議する余地は毛頭ない、唯如来の仰せを載き喜ばして貰うのみ。

清沢満之師語

われ若し、如来の御慈悲を信せず、我身の責任などを論ずるならば、百度切腹するも、わが責任をふさぐあたわず。されど如来の指導を信じたる身は、このとき責任煩惱の苦痛をまぬがれ、唯何事も如来の願力にまかせ奉って目送りすることの心安さよ。

○

人間は、今現在のこととて苦悶する場合もあるけれども、過去のことを追想してもたえる場合がすこぶる多い。落第したあとで何時までも残念に思うよりも、落第のことはあきらめてしもうて、新らしく勉強する方がよい。

他力信心の人は、すべてのこと如来の導きなりと信するが故に、過去のことはさりとあきらめて、現在の新生活の上にひかりを見出し、奮励努力すべきものである。

八以上、安藤州一師述V

アメリカの仏たち

西元宗助

アメリカの大地の、あちこちにも、不思議なほどに妙蓮華・妙好人と申すべき方々がいられる。その方々のうちで今まで紹介されることのすくない、今もお忘れがたい方のなかの、一部のかたのことを記してみようと思う。

加州の南のロサンゼルスでは、故足利浄円先生にご縁の深い病床の大野静哲師にぜひお目にかかりたいと思っていた。それが、はからずも実現してお見舞いできたのは、これはまったく清水しげる老夫人のお蔭であった。

ここに清水夫人というのは、加州大学東洋部長、仏教学者の足利演正先生夫人のお母さん。広島出身の篤信の一世の老夫人で、同夫人宅では毎月、講師をお招きして法座がひらかれるほどである。そして、どうした因縁か、この私を、あるときは先生のように、あるときは老息子のように大事にしてくださった。

さて、この清水夫人一行に案内されて訪問する大野静哲の信仰と情熱を傾けて大いに活躍なさったが、やがて過労のため肺疾に倒れ、ついに先年開教使を辞任し、閑居して病いを養っていられるのである。

さて、その大野師宅に、われわれはたどりついた。ドアをノックするまもなく、思いがけなく師みづからが迎えてくださる。鶴をおもわせるような気高いお姿、涼しい清らかな瞳、握手しながら、ふかく心うたれた。

うけたまわれは、大野師は肺疾は一応治ったとはいえ、主治医から安静を命ぜられ、来客との談話も少時間と、注意されておられるとのことであつたが、たまらなく喜んでくださって、せきこむようにしてお話をしてくださる。そして、それは身に沁むようなお話であつた。

気がついてみると、先生おひとりのようであるので、先生が座をはずされた折に、清水夫人に「奥さんは」とおたずねすると、奥さまは生活をささえるために毎日働きに出かけていられるのですとのこと、わたくしは肅然とした。しかし、先生はすこしも貧乏くさくはない。お部屋は質素ではあるが、部屋一杯に清らかな香気がただよういて先生の身辺はむしろ富貴というべきである。

あまり長居してはと、お疲れを案じて、われわれは辞去することにした。そのとき先生は、わたくしの前に一封のお餞別をおかれた。私はどうしてそれをいただくことが出

師は、同師の出版されたパンフレット「法音のひびき」によると、新潟のお寺の出身。開教使として渡米されるまで青年期には京都で故足利浄円先生に師事していられる。

そして、あるとき、ある人の僧侶に対する悪口雑言に憤激のあまり、足利先生に「こういう者をこそ、邪見憍慢の悪衆生というのでしよう」と訴えられたところ、あのやさしい先生から「大野さん、あなたはそういう人間でありますか」と、きびしく一喝され、そして、そのことが機縁になって、真剣に聞法し、やがて真実の信にめざめられたという。

それで大野師は、今でも正信偈を拝誦して「弥陀の本願念仏は、邪見憍慢の悪衆生、信樂を受持すること甚だ以て難し」のくだりまでくると、「ハイハイ、邪見憍慢の悪衆生とは、ほかならぬ、この私のことでございます」と、ひとりうなづいておりますといっておられる。

しかし、大野師は、開教使としてアメリカで、その純一

来よう。わたくしは必死になってそれを固辞した。しかし先生は、ぜひにと、おごそかにきびしく、しかも哀願するようにやさしく繰返して仰せになる。わたくしは五体投地して伏して拜んで、おしいただいた。

われわれが自動車に乗ったとき、そして発車するとき、先生は再び、やせおとろえた細い掌をあわされて、われわれを拜んでおられた。そのお姿が、今もお眼底にうかぶそして、み仏から頼まれ願われ拜まれ供養されて生かされてある、わが身を切なく思うことである。

盆会の歌 渋谷 俊

一、家ごとともす灯籠の ほかげに のりのみちしたいのこれる ゆける もろともに

二、ながれし時はかえらねど おもいだす昔の下ふかくまごころ かよい としどしに あいあうきょうの まつりかな

三、かたみにたのみたのまれつ すくしし月日よびかえし香華の まえに よりつどう おもかげ さそう まつりかな

おもいで おおき まつりかな

歎異鈔 第二章

花田正夫

①おのおの十余ヶ国の境を越えて身命を顧みずして尋ね来らしめたまう御ころさし、ひとえに往生極樂の道を問ひ聞かんがためなり。

聖人にひかれて

關東二十年のご生活を閉じられて、六十余歳の聖人は京都に歸られた。それまでは關東の念仏者達は、何時でも聞ける、何時でもお伺い出来ると、知らず知らずに安易な心になつていたが、さていよいよおられなくなると、三三五五お弟子方があちらこちらに集つて聞法は続けたものの、自見をまじえた聞きそこないからくる喰い違いがもとで争論がおこつてきた。

それも年数が経つにしたがつて我執の煩惱を根とした派閥争いとなり溝が深くなつた。そうした中であつてとうとう真剣な聞法者達は、まだ世間は乱れて、關所々々の守りも厳しく、旅路の危険も多いのに、それをも意にかけず、

で關東からたずねて来た人々をねぎらわれる。「たずね来たらしめたまう御ころさし」の一句に、その場の老聖人の温容があさやかに浮ぶ。「弟子一人も持たず」と云われ「弥陀の御催しにあずかりて念仏申し候うひと」と尊び「御同行御同朋」とかしずかれる聖人、そこに師弟はおのずから一味にとかされてしまう。

さて、關東の同朋は文学通り身の危険をも冒してお訪ねしたのであるが、さきにお聞きした種々の問題の中には聞法の上の一大事の問題から眼がそれているのもあつた、そこで聖人は、その着眼点を「ひとえに往生極樂の道を問ひ聞かんがため」と一箇所を指さされた。

このことは、我々にとって非常に有難いことである。人間に生れた真の目的は聞法にありと直指され、その仏法にも膨大な一切経があるけれど、我等凡夫の救われる道は弥陀の淨土に生れ成仏させて頂く、念仏ばかりであるぞ、と一筋に述べられる。これは決して聖人の独断ではない、すでに釈迦諸仏の出世の本懷は弥陀の本願を説くにあると大經に説かれてあり、七高僧方はその正意をうけて、そのこと一つを身に証し、我等に勤められてゐる。聖人はこれらを伝承し、我身に体得しての上に懇ろにくりかえされてのお導きである。

更に省みるに、我々に是非、善惡を見とおせる真実の智

はるばる聖人を京都にお訪ねするに及んだ。やがて都につき聖人の御住居を見出して、或は合掌し、或は涙し、或は念仏申しつつ、旅の埃りを拂ひ御挨拶申すのもそこそこ胸にわだかまる不審の一つ一つを代る代る申上げた。

聖人は、恐らく八十路を越えていられたであろが、その申出の片言隻句をもよく聞きとって下さつたと思う。聖人は決して自説を押しつけられる人ではない、説く人というよりもあらゆる人人の声をよく聞きとって下さる方であるから。

聞法者の陳述は終つた、自分の心底をよく聞きとって下さつたという満足さのうちに、そのお答を耳をそばだて、^{かたず}固唾をのんでお待ちしている。老聖人の御口からはお念仏がもれ、あたりは静かな中にも一期一会の異様な緊張感が支配している、やがて聖人のお念仏がとまってお言葉となつた。

先ず十余ヶ国の境を越えて、身の危険をもかえりみない

恵があれば、どんな教えも聞く必要はないが、煩惱に曇り我執にゆがめられていて、一寸先の見とおしも出来ない。私は病身で何時も皆様に心配おかけして申訳けないことだが私を可哀想だと言つて種々見舞うて下さつた方々の中にもすでに沢山亡くなられた。お互に自分のことがわからな

いし、また身びいきの心から正しい判断は不可能である。こうした我々には、先覚者の正しいお手引きによらなければ、盲滅法に闇の沙漠を徒らに右往左往して空しく終るよりほかに道はない。すでに種々のお教えをうけ、聖人の前に出ながらも、なお目が他にそれる關東の同朋の姿こそ、我等の迷盲をその儘に知らせて下さる人々である。

同時に私はここで、身命をもかえりみないではるばる關東から聖人をお尋ねした同朋の真剣さにふれると共に、一体自分の聞法の態度はどうなのかと脚下を省みさせられるまことに恥ずかしいことには、私自身は全く微温的な、氣まぐれなもので、頭があがらない。こうしたことが問題にならない間は、この章も氣らしくに読んでいたが、一度そこを知らされてから種々考えさせられた、次を聞く資格の無い身と思つた。そうした或目のことであつた、私自身の態度は実に生ぬるい限りであるが、二十過からずうと、念仏一つ、歎異鈔一つ、聖人一つと、数十年間ともかくもそのことひとすじを辿つてきたのは、私であつて私でない。仏

とも法とも知らない身で歎異鈔を読んだ日から、聖人の徳光にズーと引きつけられ、読むごとに、聞くごとに、大きく強くひきつけられて来たまでである。ものごとに熱中し易いけれどまた冷め易い私が、長い年月この道一筋にながることが出来たのは全く聖人の徳力である、言いかえればそのまんま如来の願力自然（がんりきじねん）にひかれたのである。そうしたことが知れると共にああそうか、関東の同朋の真剣さにうたれて、自分とは別人かのように思っていたのは間違いであった。関東の同朋も、「身命をもちえりみず」と自分で力んだのではなかった、聖人の信徳にひかれて、知らず知らずにこのような聞法の態度となっていたのであると知らされて私もまたこの同朋達の仲間に入っすなほに次の仰せを聞き入ることが出来はじめた。

②然るに「念仏より他に往生の道をも存知し、また法文等をも知りたるらん」ところにくく思召して在（お）しましではんべらんは、大きな誤なり。もし然らば、南都、北嶺にもゆゆしき学生達多くおわせられて候うなれば、彼の人々にも会いたてまつりて往生の要よくよく聞かるべきなり。

念仏ひとつ

学者が沢山おいでなるからそこに行つてよくよく得心（とくしん）がいふまで往生の要を、お聞きになるがよい、ここに来たのはお間違いだよ、とサラリと拂われる。

このお言葉は、恩師、法然上人には三十年近い修学と修行があった、親鸞聖人は二十年間の御苦勞があったけれどその道は煩惱具定の身として不可能であった。それは単なる想定ではない、実行してわが身に知られたことであつたその体験の上からおのずから出た御言葉である。

なおここで気がつくのは「念仏よりほかに往生の道をも存知しました法文等をも知りたるらんとところにくく思召してはんべらんはおおきなあやまりなり」との一節である。そこに関東の同朋の中に、聖人は我々とは違ふ、長い修学もせられてゐる、教行信証や種々の書も著していられるだから念仏以外に奥深いところもよく御存じであろう、というように、聖人を偶像視し別人扱いする心が聖人には明らかに感じられたのであろう。こうなるともう聖人は霧の中、雲の内に隠されてしまふ。我々とは違ふ、特に勝れた方が立派な浄土に生れるのであれば、その道は我々に用はないものとなる。ここに聖人の態度はおたやかでもお言葉はきびしく「おおきなあやまりなり云々」と、その迷妄を拂われる。そこには何の虚飾もない老聖人が我々と同坐して下さるのが感得される。思うに聖人は凡人のたすけ

善導大師の当時、浄土の教を奉ずる人々は多くあつたが皆身を清め心を凝らす、所謂観念（くわんねん）の念仏を尊んで、称名念仏は軽視されていた。大師はひとり観無量寿経で愚痴の女人章（あんな）希の救われる姿を凝視し、章（あんな）希は實際の凡夫であり、その底下の凡夫が極上の真実の仏土に往生出来る事実を世間に発表し、而も十惡、五逆の下品・下生の極重惡人が「無量寿仏を称えよ」の大悲に芽出度く救われることに感泣し、迷いの世界に沈みきつて浮ぶ瀬のない自身の道をもここに見出されて、弥陀大悲の至極は「称名念仏にあり」と独り仏の正意（しやうい）を明らかにされた。

後世日本に誕生された法然上人、叡山に登つて四十三歳まであらゆる修学修行のはてに、智目行足（ちもくぎょうそく）を欠く身に気づき闇夜に道に迷う悲歎の中に、善導大師の書をひもとぎ、「一心に弥陀の名号を専念して、時節の久近（くきん）を問はず、念々に捨てざれば正定之業（しようじやうのぎやう）と名づく。彼の仏願に順ずるが故に！」の一文、ことに仏願に順ずるが故にの一句に、慶喜信順して念仏者となられた。その上人が中心の勸化は、「南無阿弥陀仏、往生之業、念仏為本」ひとつであつた。その上人の御導きをうけられた親鸞聖人は、また念仏ひとつ、と関東の同朋を前に告げられる。

その他のことが聞きたいのであれば、奈良や叡山に名高い

れる大道を生涯かけて明らかにして下さつたのであるのに聖人を尊敬するあまり、うっかりすると偶像化してその御本意からそれ易いことはよく注意せねばならぬ。

③親鸞におきては「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし」とよき人の仰を被りて信するほかに別の子細なきなり。

聖人の御自督

関東からの同朋の上にかかる霧をきびしく拂いのけられた聖人は、いよいよ問題の中心にふれようとされて居ずまゝいもおのずからあらためられた。そして「親鸞におきては」と我名を名告られる。聖人は肝腎なことを述べられる時は親鸞という個有名を用いられている、ここに個に徹しられた聖人の德音にふれる。現代は個人を軽視して社会を偏重するが、個人に徹しておのずから開けてくる社会でなければ、唯個人を社会と置きかえ握りかえたただけでは五十歩百歩の差である。

「親鸞におきては」と名告られる聖人は、地の底から生え抜いて頭を地上に現している巖のような磐石不動の力とたしかさがあたりを風靡する。

「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし」

と仰る聖人の心には、最早関東の同朋達の姿も声も消えて、二十九歳、吉水の禅坊で会見された時の恩師法然上人の温容と慈顔が浮び、その御声は耳底に深く刻まれ、ありありときこえたことであろう。

恩師法然上人にめぐり会われるまでに、思えば暗く長い迷路が続いた。幼くて両親に別れ、久遠の親を叡山に求めて、行を積み、智を磨いた二十年、「定水を疑らすといえども識浪しきりに動き、心月を観ぜんとすれども妄雲なお覆う」とはその修学修行の真剣さと空虚さへの悲歎であった。正像末和讃に

自力聖道の菩提心　こころもことばもおよばれず
常没流転の凡愚は　いかでか發起せしむべき

仏道を修しながら、肝腎な仏果菩提を求める心を断念せなければならなかった聖人、すでに聖道の道は閉じて、常行三昧堂で弥陀仏を中心に念仏を行じながら幾年月は過ぎ善導、源信の両師の書も幾度か読み続けられたことであろうが、機縁熟さず、自力の執心は牢として抜く能わなかった。遂に叡山で絶望された聖人は、幼時から尊み慕われた聖徳太子を偲び、当時太子の建立と伝えられていた六角堂に百日の参籠を続け、太子の本地（ほんち）救世観世音菩薩に祈願をこらされた。愚考しますのに、法然上人はすでに六十九歳、吉水の禅坊には念仏の声は高くこだましてい

次の述懐である。

④念仏はまことに浄土に生るるたねにてやはんべらん、また地獄に墮つべき業にてやはんべらん、総じてもて存知せざるなり。たとい法然上人にすかされまいらせて念仏して地獄に墮ちたりともさらに後悔すべからず候。その故は自餘の行を励みても仏になるべかりける身が、念仏を申して地獄に墮ちて候わばこそすかされたてまつりてという後悔も候わめ、いずれの行も及び難き身なればとても地獄は一定すみかぞかし。

「よきひとの仰せを破りて信するほかに別の子細なきなり」と、それ一つで心の闇は破られ、根本の願いの満足された聖人が、ここまで語られた時、関東の同朋のある者は、「ああそうなのか!」と同心随喜の涙にくれる者もあったであろうが、まだ不審がのこる人々もあったであろう。そこに聖人は、よき人の仰せの目あてを御自身の上で告げられる。

まず「念仏は浄土のたねやら地獄の業やら」自分の智慧ではさっぱり知る力もないと無智を慚し、更に「いずれの行も及び難き身」と無能を愧じ、「地獄一定の身故に、法然上人の仰せがうそで、念仏して地獄におちた」としても

た。奈良や叡山の学僧達はすでに上人を異端者として、批判の声は高かったであろう。親鸞聖人はその吉水と目と鼻の叡山に住まれてその噂を知られぬ筈はあるまい。それなのに直ちに禅坊を訪ねられなかったには、未だ信眼の開かれなかった聖人には、それが是か非か、それが浄土への道か、地獄への道か、知ることが出来なかった、ここに観音菩薩の御前に参籠しておのずと知らされる日を待たれたのであろう。幸いにその機は熟し、九十五日の暁、忽然として聖人の意は定まって、急いで禅坊に老上人を訪ねられた。嗚呼、両聖人の吉水の会見!二十九歳の青年僧と六十九歳の念仏に円熟された老師、聖人の打ち明けられる一は老師の十五の時から四十三歳までに体験されたと全く同じであった。称名裡におそらくは涙を浮べられながら、聖人の述懐をのこらず胸におさめられた老師は、御自身の体験をそのままだに、

「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし」

と、如來がかねて選びとって、煩惱具足の我等には、これ一つぞとお勧め下さる大慈大悲の念仏を指さされて、これこそ仏願に順ずる白道であると、宗の渊源をつくし、教の理致をきわめてのお導きが続いた。爾來百ヶ日、降る日も照る日も聖人の足は禅坊にはこぼれて、遂に浄土の玄意を受得せられたのである。その聞きとられた内心の告白が

「何等後悔するところはない」と述べ、本願の念仏はこの無智無能な者のためよと言いはなたれている。

近角先生の法語に「ころんで角力をとれ」と言われている。ころぶとは、地獄一定の身に大悲は注がれていることであろう。池山先生は「何が間違っても、彼が間違っても、間違いのないのは自分が地獄一定ということだ」と或時ひとりごとのようにつぶやかれた、そこにこそ本願の花は開き、念仏の実は結ぶ。この地獄一定の地盤を離れて本願にある場所はない。

聖人は一気柯成に、心に浮ぶほとんどもを云い終えられたそれなのに、聞く者の中にはまだ疑雲の晴れやらぬものが見えた。そこに、最後のお言葉が流れる。

⑤弥陀の本願まことにおわしまさば積尊の説教虚言なるべからず、仏説まことにおわしまさば善導の御釈虚言したまうべからず、善導の御釈まことならば法然の仰せそらことならんや、法然の仰せまことならば親鸞が申す旨またもて虚しかるべからず候か。

今や聖人の御心は、前に居ならぶ同朋達を超えられて、直ちに弥陀の本願を仰がれる。地球や月はもとよりのこと一切の無数の星がその光源を太陽に帰するように、本願の

太陽から放たれる十方無碍の無量の光明は、やがて釈尊の光顔の巍巍と輝く御姿の説法となり、釈尊の説法に驚喜された善導大師は、十方諸仏に証を請われつつ凡夫往生の一道は念仏一つにありと定められ、法然上人また愚痴十悪の身と告白されつつ専ら念仏を勧められ、親鸞聖人深く弥陀釈迦・高僧方の仰せを身一つにうけて、愚身の信心はこればかりである、と独白せられた。

すべて真実なるものは、最も古くして常に生き生きとした新らしいものである。単なる新らしさはやがて陳腐するし、新らしさのない古物は骨董品の死物である。ことに久遠の真実をいのちとする仏法においては、それはきびしい法然上人が浄土の入門を開かれる時、三経を選び、五祖をあげ、微塵も私見のまじらないことを誓われている。善導大師の親経の解釈を執筆せられたとき、毎夜証を古仏に請われていて、後にこの書を手にする者に「一句一言加減を許さず」とまで注意されている。

親鸞聖人また三経と浄土論とを中心に、三国七高僧の真意を掲げられて、

弘経の居士、宗師等

無辺の極濁悪を極済したまう。

道俗時衆ともに同心に

唯、斯の高僧の説を信ずべし。

有様であったことと思われるが、宿善いまだ熟さず、そこに低迷する者もあったであろう。

「詮ずるところ愚身の信心におきてはかくの如し」、愚かな我身の信心はつまりこの通りである、と仰言る。そして「このうへは」と、申上げるべきことはすべて云い尽くした、これ以上は何にもない、これをお聞きになったうへは「念仏をとりて信じたてまつらんとまた棄てんとも面々の御はからいなり」と仰言る。

聖人は仰言るべきことははっきりと仰言るけれど、決して相手に無理強いはされない。それは、小慈小悲も無い自身の無力さと、一切衆生を二子の如く慈愍される仏力のたしかさを信知される聖人の自然の徳風である。こうした聖人の心中には、いくら生命をかけての聞法も、機縁が熟さなければ信じられないし、かといってこのままではまた疑情のさわりに苦惱も多いことであろうが、これだけのことを心に入れておいてくれれば、必ず何時かは気がついてくれるに相違あるまい、ただその時の一日も一刻もはやかれと念じられたことであろう。

更に聖人のこうしたお言葉によって、私共自身の脚下が照らし出され、おのずからわが行くべき道も定まるのである。

以上

と伝承されると共に、

「弥陀五劫思惟の願をよくよく案すれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり、さればそくばくの業を持ちける身にてありけるをたすけんと申し召し立ちける本願のかたじけなさよ」

と、わが身にかけて日々に新しく、生き生きとお味わいになって、そのままをお勧め下さっている。ここに真実の教は、無私無我な人を縁としてその光芒を放つ。

私は中学生の頃修学旅行で二見に一泊し、早朝起こされて、海辺に旭日ののぼるのを拝した。東天が白らみ遠い山脈の上に旭日がその姿を現すと共に、今まで灰色であった海面がキラキラと千波万波金色にひかり輝いて私共の足もとにまでとどいた。その壮厳さは今なお忘れられないが、聖人のこの表白をきく時、同じよろこびにふれる。

⑥ 詮ずるところ、愚身の信心におきてはかくの如し。

この上は念仏をとりて信じたてまつらんとまた棄てんとも面々の御計らいなりと、云々。

聖人は言うべきことのすべてを述べおわられて、再び眼を関東の同朋の上にそそがれた。そのほとんどは直き直きの聖人のお導きに長年の疑雲も晴れ、感悦隨に徹するという

その時私は地獄に居た

水谷美津子

その時私は地獄に居た。

なくてはならないそのお言葉が早すぎもおそすぎもせず、きっかりその時どうして私の上に来たのか知ることが出来ないのです

——念仏申さんと思ひ立つ心の起る時——

——念仏申さんと思ひ立つ心の起る時——

御仏の慈愛のみ手の素早さはまたたきする間もないと云う

聞いたお話をそのままに、あっと云う間に大いなる御手に抱かれて念仏申しておりました。

つまり、ころび、よこれても

御手の中の安けさよ！

——念仏申さんと思ひ立つ心の起る時——

——念仏申さんと思ひ立つ心の起る時——

それ以上の言葉では助かりようもなかった私の上に

どうしてその時、その言葉が来たのか今でも知ることが出来ないのです。

南無阿弥陀仏。南無阿弥陀仏。

あ と が き



仰ぎてもまた仰ぎても仰ぎても
仰ぎたらざるおおぎ御めぐみ
御仏の影さまざまにあらわれぬ

同朋知識ひとびとのうえに 感謝無上
且つまた遠く近く、未見の方々からのお心
尽しもことに身にします、

いまだ見ぬ人のまことのかよいきて
仏のころしみじみとおもう 聚墨生

○ ○

八月は近角常音先生の御忌月にあたりま
すので、大字様の心のこもった記録を頂き
御晩年の御郷里での御法話の一つをいただ
きました。仏法者、後世者ふる心を深くか
えりみさせられます実話であります。

福島先生の御講話は、久遠のみ親、み仏
の飽くまでもお一人ばかりきによることを
徹底的に知らせて頂きました、

釈迦弥陀は慈悲の父母 種々に善巧方便
し

我等が無上の信心を 發起せしめたまい
けり

和才翁の御原稿は酷暑のみぎり浄土の涼
風をうけるよろこびを覚えます。西元宗助
さんは北米訪問中の感銘録として大野静哲

師の紹介をして下さいました。師のお味わ
いは七月号に頂きましたので、御読み下さ
ったことと存じます。

御案内

九月第一、二、三、日曜、午後一時半、
一道会例会。
市電、新郊通り一丁目下車、東へ入ル三
筋目、左入ル二軒目。名鉄、呼続駅下車
徒歩二十分。国鉄、笠寺駅下車市電乗り
換え。

定価 半年 二百五十円(送共)
一年 五百円(送共)

編集・発行人 花田 正夫
名古屋市南区駄上町二ノ八八

印刷 吉野 穂志郎
愛知県西加茂郡三好町大字福谷

発行所 慈光社
名古屋市南区駄上町二ノ八八
振替口座名古屋一〇四七〇番